

アドリアーン・コルネーリセン
—忘れられたリーフデ号の元乗組員—

クレインス桂子

「平戸オランダ商館関連文書」に含まれる書状のうちのいくつかに、アドリアーン・コルネーリセン (Adrijaen Cornelissen, ?-?) という名前がみられる。それらの書状の一つからは、彼が 1600 年に日本の豊後に辿り着いたリーフデ号の乗組員の生存者の一人であったことが分かる。

リーフデ号の乗組員の生存者は、1600 年に日本に辿り着いた時点で 24 名であったが、そのうち日本到着後まもなく数名が死亡し、18 名になったという。フレデリック・カスパー・ウイーデルは『マゼラン海峡経由南米および日本へのマヒュとコルデスの航海 1598～1600 年』(De reis van Mahu en de Cordes door de Straat van Magalhães naar Zuid-Amerika en Japan, 1598-1600. 3 vols. Martinus Nijhoff, 1925.) にリーフデ号の乗組員のうち 14 名の名前を掲載している。しかし、同リストにはアドリアーン・コルネーリセンと同一の名前は見あたらない。

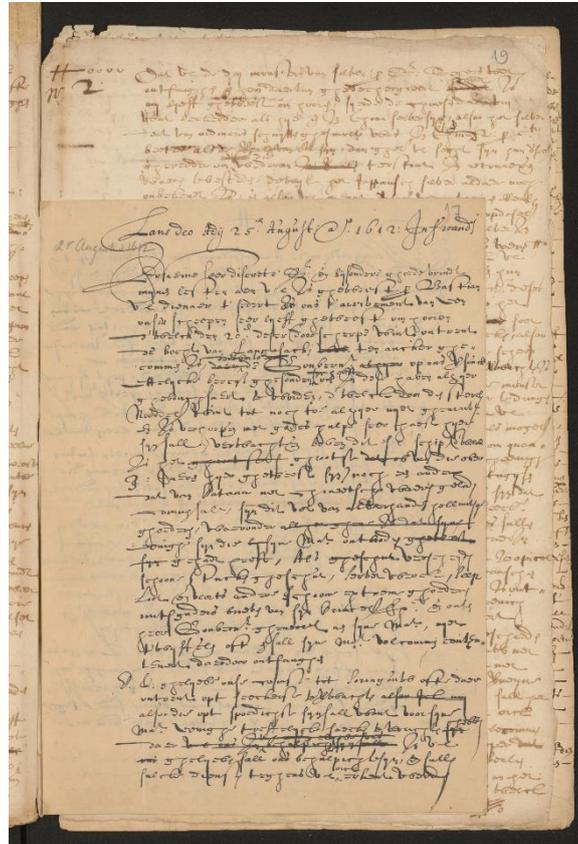
リーフデ号の乗組員の生存者の大半はその後、日本において新たな生活を始めることになった。このうち、ウィリアム・アダムス (William Adams, 1564-1620) をはじめ、ヤン・ヨーステン・ファン・ローデンステイン (Jan Joosten van Lodensteijn, 1556?-1623) やメルヒヨル・ファン・サントフォールト (Melchior van Santvoort, 1570?-1641)、ヤーコブ・クワッケルナック (Jacob Quaeckernaek, ?-1606) については、先行研究や伝記などで取り上げられ、経歴やその後の人生についてある程度知られている。

森良和氏は『リーフデ号の人びと：忘れ去られた船員たち』(学文社、2014 年) の第 7 章「他の船員たち」において、そのほかのリーフデ号の元乗組員についても丹念に拾い上げ、彼らのその後の状況について紹介している。しかし、同書にアドリアーン・コルネーリセンについての言及はない。

ところが、初代平戸オランダ商館長ジャック・スペックス (Jacques Specx, 1588-1652, 平戸オランダ商館長として 1609 年～1612 年および 1614 年～1621 年に在任) からウィリアム・アダムスに宛てられた 1612 年 8 月 25 日付の平戸発信書状 (VOC 1054, fo. 17rv) に、アドリアーン・コルネーリセンがリーフデ号の元乗組員であったことが示される記述がみられる。

【史料 1】(下線は筆者による)

貴殿の船の人員の一人であったアドリアーンは 3 年前に秘密裡に当地から出発して、神の加護によってオランダへの渡航を遂行して、この当該の船で再び当地に到着した。彼の妻と娘にそれを伝えて下さい。



スペックスからアダムスに宛てられた 1612 年 8 月 25 日付書状の控

「貴殿（ウィリアム・アダムス）の船の人員の一人であった」という記述からは、アドリアーン・コルネーリセンがリーフデ号の元乗組員であったことが分かる。そして、日本に妻と娘がいたことも伝えられている。1600 年に日本に到着後、日本での新たな生活を築いていたようである。

また、上記引用文の記述によると、コルネーリセンはその 3 年前、すなわちオランダ東インド会社 (VOC) の最初の船が日本に寄港した 1609 年に日本からオランダに渡ったという。オランダ東インド会社の史料によると、確かに、1609 年に二隻のオランダ船ローデ・レーウ・メット・ペイレ号およびグリフィユーン号が平戸に初来航し、その年の 10 月に平戸を離れている。そして、ローデ・レーウ・メット・ペイレ号の方は 1610 年 7 月にオランダに戻っている。つまり、コルネーリセンはこのローデ・レーウ・メット・ペイレ号に乗船してオランダに渡航したことになる。

上記引用文中のコルネーリセンが再び平戸に戻ってきた「当該の船」とは、その具体的な船名がこの書状においてどこにも記されていないが、この年日本に来航したローデ・レーウ・メット・ペイレ号を指している。この船は、1609 年に日本寄港後オランダに戻った

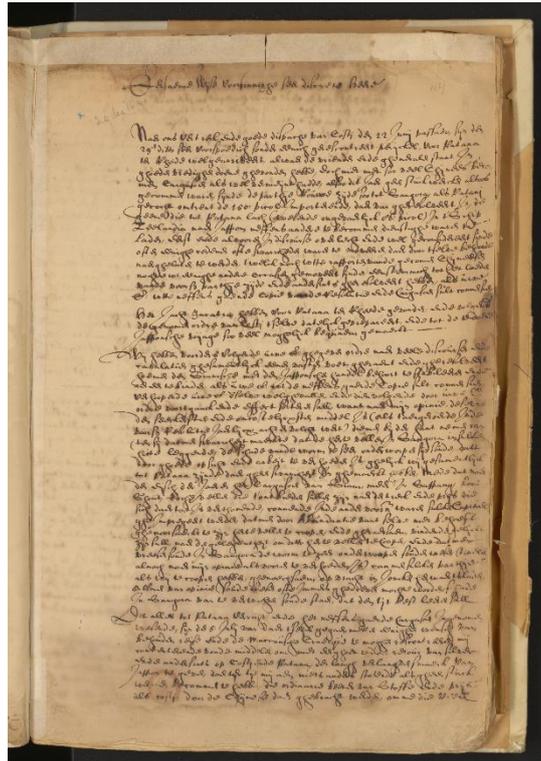
前述の船である。同船は祖国オランダへ戻った後、まもなく 1610 年 12 月にオランダから出航し、1612 年 8 月に平戸に再び来航している。なお、この船には、スペックスの後任として第二代平戸オランダ商館長に就任するヘンドリック・ブラウエル (Hendrick Brouwer, 1581-1643, 平戸オランダ商館長として 1612 年～1614 年に在任) や、商務員エルベルト・ワウテルセン (Elbert Woutersz, ?-?) が乗船していた。

コルネーリセンがローデ・レーウ・メット・ペイレン号で日本とオランダを往復したとすると、オランダに滞在した期間はわずか 5 カ月間だけだったということになる。妻と娘を日本に残して、長期間の渡航が必要な上に、危険を冒してオランダに戻るとするのは、いかなる理由があったのであろうか。

さらに、第三代としてふたたび平戸オランダ商館長に就任したスペックスからバンタム駐在の商務総監ヤン・ピーテルスゾーン・クーン (Jan Pieterszoon Coen, 1587-1629) に宛てられた 1614 年 12 月 29 日付の書状 (ハーグ国立文書館所蔵オランダ東インド会社文書 VOC1058, fos. 114-122) には、スペックスの前任者であったブラウエルがその年にコーチシナとトンキンに二名の人員を派遣したことについての報告がみられる。その二名のうちの一人がアドリアーン・コルネーリセンであったことが次のように記されている。

【史料 2】(下線は筆者による)

今年ブラウエル氏によって、二人の人が別々で、コーチシナおよびトンキンに積荷をもって派遣された。そのうちの一人は、神よ、どうかそうでなかったらよかったのに、(同様に彼の地に派遣されたイギリス人と共に) 殺害された。そして、両ジャンク船および積荷、イギリス人のものについても、我々のものについても、殺害のこと以外に確かな情報は聞いていない。それについてイギリス人の所為にされている。これについては、同封の書状でお分かりになるだろう。[彼の地に] 残された同積荷は 8500 ギルダールの価値がある。アドリアーン・コルネーリセンというもう一人は嵐や悪天候の大きな危険の後に無事に戻って来た。商品を船の外 [の海] に投げ出したこと、そして彼が運んで来た生糸などが湿ったことで、利益も大したことはなかった。



スペックスからクーンに宛てられた 1614 年 12 月 29 日付の書状の冒頭部分

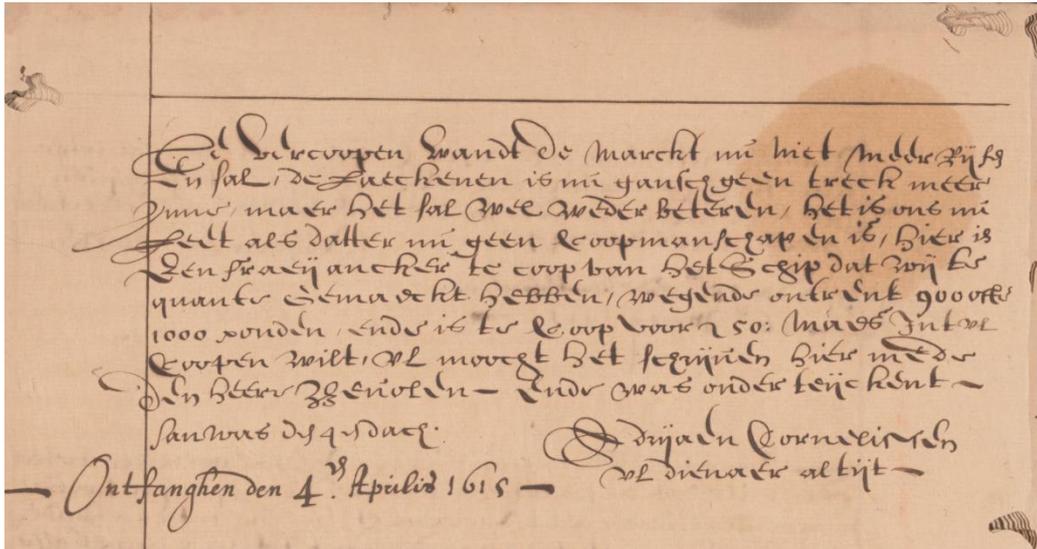
この書状から、コルネーリセンが 1614 年には、平戸オランダ商館のために当時の平戸オランダ商館長ブラウエルのもとで働いていたことが分かる。また、同年、コーチシナあるいはトンキンのどちらかに派遣され、嵐に遭いながらも日本に無事に戻って来たことも知られる。

また、スペックス受信綴帳（ハーグ国立文書館所蔵オランダ東インド会社文書 NFJ276）の中にも、アドリアーン・コルネーリセンからスペックス宛に発信された書状が 6 通みられる。内容はいずれも商務関係の報告であることから、商館長がブラウエルからスペックスに交代した後も引き続き 1614 年から 1615 年にかけて平戸商館のために働いていたことが分かる。（表 1）

なお、この 6 通のうちの一通、和暦 3 月 4 番目の日〔西暦 1615 年 4 月 1 日〕付長崎発信書状（NFJ 276, fo. 9r）には、コルネーリセン自身も関わって建造したという船に付属していた錨についての言及がある。

【史料 3】

我々が関東で造った船に付いていた素晴らしい錨が当地で売りに出されている。その重量は 900 あるいは 1000 ポンドであり、250 匁で購入できる。貴殿がそれを購入したければ、ご連絡下さい。



コルネーリセンからスペックスに宛てられた和暦3月4番目の日〔西暦1615年4月1日〕付書状の写しの末尾。5行目に anker（錨）、6行目に quanto（関東）という語がみられる。右下から2行目に Adriaen Cornelissen の名がみられる。

リーフデ号が日本に到着してから数年経った1604年頃に、アダムスが家康に命じられて日本の職人とともに造船事業を主導したことがあった。この造船事業にコルネーリセンたちリーフデ号の元乗組員も関わった。

また、同受信綴帳に収録されている在バンタム商務総監クーンからスペックスに宛てられた1615年6月10日付書状（NFJ 276, fos. 34v-37v）には、アドリアーン・コルネーリセンについて次のような記述がある。

【史料4】

アドリアーン・コルネーリセンという人によって書かれた書状を同封する。彼がどうい
う人物であるのか、我々は分からない。したがって、それについて最終的な回答を与
えることが難しい。彼がそちらで会社に有用であり、留まる気があるならば、彼を再び新
規に雇用してください。彼が娘を先に行かせたがっているのであれば、その娘をオラン
ダ人に嫁がせ、アンボイナへ送るか、あるいは、未婚のまま彼の地でキリスト教の教
育を受けさせても良い。彼への未払い分あるいは彼が欲しがらるだけの額を持参金とし
て彼女に支払う。これについては、重役殿たちの判例に従って、総合会社にとっての最
善策および申請者の十分な満足ならびに子供の保護を図って処理してください。

この書状からは、コルネーリセンが平戸オランダ商館での雇用継続の依頼と娘の将来に
ついての相談のために、バンタムにいる商務総監クーン宛に書状を書いたことが分かる。

さらに、同受信綴帳に収録されている平戸オランダ商館の事務員エルベルト・ワウテルセ

ンからスペックス宛に発信された書状二通にも、アドリアーン・コルネーリセンへの言及がある。

【史料 5】

アドリアーン・コルネーリセンが宮島および山口で 1000 タエル分の非常に純度の高い精錬銀を 4 ないし 5 パーセントの手数料で交換したことは良いことである。

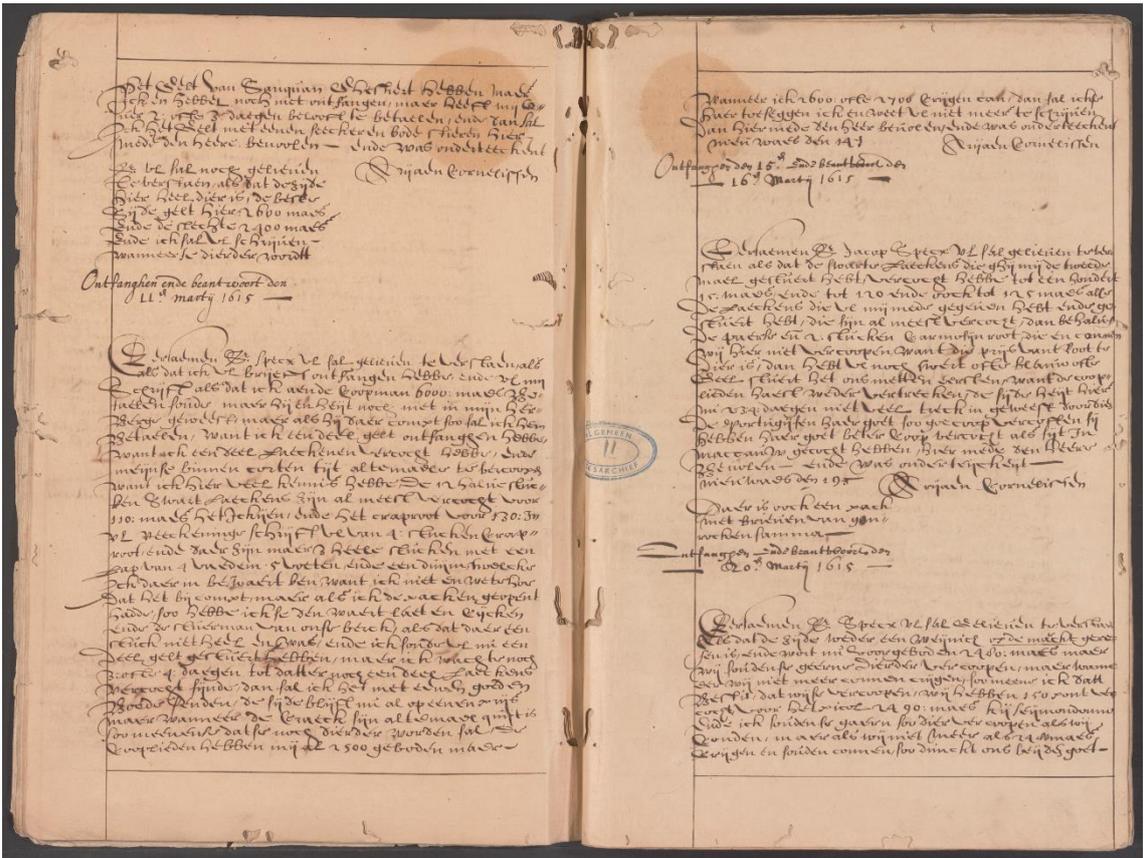
このワウテルセンよりスペックス宛の 1615 年 9 月 2 日付京都発信書状 (NFJ 276, フォリオ番号なし) からは、コルネーリセンが、宮島や山口に派遣され、平戸オランダ商館のために商務関係の仕事をしていたことが分かる。一方、この書状の三か月半後に京都から発信されたワウテルセンよりスペックス宛の 1615 年 12 月 18 日付書状 (NFJ 276, フォリオ番号なし) には、コルネーリセンが死亡したことが伝えられている。

【史料 6】

アドリアーン・コルネーリセンの死亡を聞いて、私は気の毒に思う。しかし、それは神の思し召しであった。

以上みてきたように、アドリアーン・コルネーリセンは、苦難に満ちたリーフデ号の航海を乗り切り、生き残って 1600 年に日本へ辿り着き、異国での生活を始めた。日本で妻と娘との家庭を築くなか、新たなオランダ船の来航を受けて一時的に帰国した時期もあったとはいえ、平戸オランダ商館の業務に従事することで生計を立てながら、1615 年に日本で人生を終えることになった。

(表1) アドリアーン・コルネーリセンよりジャック・スペックス宛書状(NFJ276)				
	発信日付	発信場所	受信・返信日付	NFJ276の フォリオ 番号
①	[1614年10月18日以前]	[長崎]	10月18日に受信、同月25日に返信	fo. 3v
②	[1615年3月11日以前]	[長崎]	1615年3月11日に受信し、返信	fo. 8rv
③	2月14番目の日 〔西暦1615年3月13日〕	[長崎]	1615年3月15日に受信し、16日に返信	fos. 8v-9r
④	2月19番目の日 〔西暦1615年3月18日〕	[長崎]	1615年3月20日に受信し、返信	fo. 9r
⑤	3月4番目の日 〔西暦1615年4月1日〕	[長崎]	1615年4月4日に受信	fo. 9r
⑥	1615年6月28日	山口	1616[5?]年7月4日に受信	fo. 23r



スペックス受信綴帳にみられるコルネーリセンからスペックスに宛てられた複数の書状の写し

(表2) アドリアーン・コルネーリセン関連年表	
年月	事項
1598年6月	ロッテルダムから出航のリーフデ号に乗船
1600年4月	リーフデ号の乗組員として日本の豊後に辿り着く
1600年～1609年	日本で妻と娘と生活
1609年10月	ローデ・レーウ・メット・ペイレン号で日本を離れる
1610年7月	オランダに帰国
1610年12月	ローデ・レーウ・メット・ペイレン号でオランダを出発
1612年8月	平戸に到着
1614年	コーチシナまたはトンキンに派遣された後、日本に戻る
1614年10月頃～1615年4月	長崎で平戸オランダ商館のための商務活動に従事
1615年6月頃	宮島・山口で平戸オランダ商館のための商務活動に従事
1615年12月頃	死去